

野鳥を生かした地域振興

「鳥くん」と古屋さん意見交換

南足柄



意見交換し合った後、記念撮影に納まる、鳥くん(右)と古屋さん(中央)ら

日本で唯一のプロバ・永井真人さん(右)が、ドウトッチャーといのほど、南足柄市塚原の「鳥くん」(本名の「TOMIOFAR」

ムを訪れた。同ファームを運営する同市の元幹部職員・古屋富雄さんと対談し、自然を生かした地域振興などについて意見を交わした。

鳥くんは講演会やテレビ、イベント、小中学校での特別授業などで活躍。歌手の経歴も持ち、ジャニーズグループに楽曲提供もしていた。

地元農家と協力し活性化

委員やバードウォッチング検定1級の資格を取得し、自ら撮影した写真を使った鳥の図鑑なども執筆している。今回はカワラビワの撮影で訪問した。

同所では、早咲きのヒマワリの種を食べに来る姿が確認されており、約1カ月前には、周囲を埋め尽くすように600羽近くが飛来。この様子に驚いた古屋さんは共通の知人を通して、鳥くんに情報を提供し対面することとなった。

対談で鳥くんは、バードウォッチング人口は近年増加傾向にあると説明。理由の一つは、自分が撮影した鳥の写真などの記録を、個人がブログやSNS

を使って手軽に発信できるようなったこと。今年3月、国内ではほとんど観察例がない貴重なウタツクミが相模原市で見つかった際には、愛鳥家が連日集まった。多い日には300人以上が訪れ、1羽の鳥にレンズを向けたり、

野鳥は多くの人を集め、地域の観光資源にもなり得ると説明した。一方でこの取り組みを実現させるには、愛鳥家のマナー向上も求められている。撮影のベストポジションを探すため、田畑へ入り込んで荒らしてしまうケースも少なくない。

鳥くんは、この問題をクリアすれば地域活性化につながると思いを語った。一人ひとりが気遣いを持つことで、地域の農家からの支援も受けられるとしている。

実際に、千葉県では冬季に田んぼの一区画に水を張り、越冬のハクチョウを迎える取り組みがある。毎年多くの観光客が観察に訪れ、地元農家は農産物販売などをしながら、共存しているという。全国を回って鳥の観察を続けてきた鳥くんは、複数の事例を交えて語った。

市職員時代に、季節の花を使った地域おこし「あしがら花紀行」を手掛けた古屋さんは、この考えに賛同。どちらも観光地ではなく、住民らの居住スペース付近でイベントを開いている点が似ている。観光客がた足運ぶだけでなく、農産物を購入することで地元農家にもビジネス面のメリットが生まれ、活性化が図られる。

また、古屋さんは「来た人が撮影した写真をネットに配信するほか、コンクールに出展することで、直接の知人以外にも情報を伝えられる。そうすれば、より多くの人が訪れるよまになる」と、自然を生かした観光振興に意欲的な見解を示した。



ヒマワリにとまるカワラビワ(写真は鳥くん提供)